

多主体連携による「+ α 」学習活動と成果の可視化

—多言語プレゼンテーション・多言語音声ガイド・言語学習セミナー—

金 恵媛、森原 彩

1. はじめに

山口県立大学は2012年度に「グローバル人材育成推進事業タイプB（特色型）」に採択以後、地域の課題に取り組み、地域資源を世界に発信する、地域と世界の懸け橋になれる「Inter-local人材」の育成を目指し更なる教育内容の充実を図っている。具体的には国際文化学部の既存のカリキュラムに加え、①「域学共創学習プログラム」の展開、②「4技能+ α 」総合的外国語運用能力の育成、③IPDポイント制度の導入、④「域学連携コンソーシアム」の設立を進めてきた。今年度（2015年度）からは段階的に新カリキュラムが開始された。

本稿では「Inter-local人材」の育成を目指す教育のうち、特に言語教育プログラムの取り組みについて述べる。山口県立大学の言語教育プログラムは「総合的外国語運用能力（4技能+ α ）」の補強を目指している。「4技能」とは「話す」「聞く」「書く」「読む」のことであり、「+ α 」は「異文化コミュニケーション力」と定義し、異文化・自文化理解を土台にもつ内容表現、伝えたいことを発信できるプレゼンテーション力を強化した能力を意味する。外国語の知識だけでなく、実践的な「異文化コミュニケーション力」を身につけ、即戦力となる言語運用能力の育成を目指している。また、学生の自主学習・自律学習の習慣化への支援を強化している。2013年度は、言語能力スタンダードの体系化とカリキュラムの改善、LMSを活用した授業展開などICTを活用した授業と自学環境の基礎作りを行った（林・森原, 2014¹）。2014年度は学生の自主学習を習慣化する支援の取組みとして「外国語学習会」と「学習サポーター」活動の整備と活性化、多言語プレゼンテーション教材『+ α ：多言語プレゼンテーション』の発行を重点事業として行った（金・森原, 2015²）。これらの基盤造成に続き、2015年度は主に以下の3つの活動を重点的に取り組んだ。1つめは昨年度完成したプレゼン教材を授業で活用した外国語プレゼンテーション授業の本格的導入、2つめは学生が中心となり多言語での観光ガイドアナウンスの制作に取り組んだこと、3つめは言語学習動機付け強化及び目的の明確化を図るための「言語学習と私の未来」セミナーの開催である。以下で詳しく報告する。

2. 外国語授業におけるプレゼンテーションを取り入れた教育実践

2.1 プレゼン教材『+ α ：多言語プレゼンテーション』の概要

プレゼンテーション教材『+ α ：多言語プレゼンテーション』は2014年度の重点プロジェクトとして4言語（英語、韓国語、中国語、日本語）で作成した。教材の作成は、国際文化学科のディプロマ・ポリシー（DP：学位授与の方針）に実践的な外国語学習としてのプレゼンテーション学習への支援強化が取組まれていることに基礎を置く。併せて言語教育プログラムにおいても「総合的な外国語運用能力（4技能+ α ）」の育成を目指しており、基礎的な知識だけでなく、実践的な外国語運用能力と発信力を強化するために活用できる教材が必要だったからである。既存にも類似した外国語プレゼンテーションの教材はあるもの

1 林炫情・森原彩（2014）「『4技能+ α 』総合的外国語運用能力の育成を目指して」『山口県立大学学術情報（国際文化学部紀要）』（7）：105-116

2 金恵媛・森原彩（2015）「総合的外国語運用能力を育成するYPUの取組み—「+ α 」発信型プレゼン教材の作成と外国語学習会の活性化—」『山口県立大学学術情報（国際文化学部紀要）』（8）：43-54

の、外国語運用能力や発信力を強化するプレゼンテーションに特化した内容のものは少ない。また、英語は英語、韓国語は韓国語、中国語は中国語、といった言語別になっており、学習内容の統一が難しい。そこで、学生が習得すべき「+α」能力を強化するために共通した内容で多言語にわたり利用できるプレゼンテーション教材を作成することとなった。

テキストは3部構成からなる。第一部「プレゼンのツボ」ではプレゼンの準備から発表までのプロセスをプレゼンテーションの型として学ぶことができる。具体的には、発表テーマの絞りかた、プレゼンテーションの構成やスライド、レジメで用いる図表の用い方、効果的な伝達方法、そして発表の際に気をつけることなど、準備する順番、項目ごとに記述した。

第二部「プレゼン道場」では、学生に考える手がかりを提供する目的を勘案して「異文化」をテーマに掲げ、国際文化学科の授業担当者（2014年度時点）全員が執筆を行った。トピックは「日本の鬼、中国の鬼」「Expo 2013 in Japan?」「中国の京劇芸術」「英語で日本文化を勉強する」など地域の固有性へ着目したものと「人間と社会」「外国語のすすめ」「前向きな姿勢と行動力」「インターテキストチュアリティ」「グローバルを実践する知恵」など異文化にある普遍性に着目したものであった。「プレゼン道場」とタイトルをつけたのは、様々なトピックで学生に何度も考える「練習」をし、自らの意見を発信する準備として練習を積み重ねてほしいと考えたからである。

第三部「プレゼンのための便利表現」ではプレゼンテーションを実施する上で必要不可欠な言い回しや決まり文句を英語、韓国語、中国語、そして日本語の各言語別にまとめた。プレゼンの導入部分、プレゼン目的の説明、図表や調査結果の解説、メッセージの伝達と説得、結びにおける挨拶表現など、プレゼンの流れに沿って記述しており、学生がプレゼンの内容に応じて組み合わせ活用できるように工夫した。「プレゼンのための便利表現」についてはネイティブによる音声ファイルを作成し、オンライン上で発音練習ができるe-learning教材とした。

2.2 各言語授業におけるプレゼンテーション教材の運用実践

多言語プレゼン教材『+α：多言語プレゼンテーション』は2015年度前期に国際文化学部生1～4年生の全員に配布し、韓国語、中国語、英語の外国語授業で教材として用いられた。韓国語、中国語においては大学で初めて学習をする学生が多いことから、2・3年生対象の授業を中心にプレゼンテーションを実施した。ただし1年生対象の「韓国語Ⅰ」においても課外学習時間の活用と支援を工夫することで、プレゼンテーションの実施を可能とした。詳細は後に詳しく述べる通りである。英語においては初年次の英語科目は教養科目として位置づけられていること

から授業にプレゼンテーションを取り入れることができなかった。また、授業でプレゼンテーションを実施したものの、課題とはしなかった授業もあった。理由としては、履修者のレベルがまちまちであったことや従来の授業ではプレゼンテーションを取り入れていなかったことから、本格的に授業に取り入れるにあたり更に調整が必要だったことが挙げられた。

本稿では2015年度前期に開講され、なおかつプレゼンテーション発表を課題とした9つの授業の実践報告とともに、プレゼン発表に関する学生

表1. プレゼンテーションを課題として取り入れた2015年度前期授業

言語	授業名	学年	実施回数	実施時期	テーマ	時間 スライド数
韓国語	1 韓国語Ⅰ	1年	1回	期末	私と県大と将来像	1分 スライド3枚
	2 韓国語講読Ⅰ	2年	1回	期末	自己紹介	10分 スライド3枚
	3 実践韓国語Ⅰ		2回	①中間	授業で取り上げたテーマ 例)ロボットとの共存、 ホランアヒア、アパート社会	3分
		②期末		自由	5分	
	4 韓国語 リスニングⅢ	3年	1回	期末	自己紹介	15分
5 実践韓国語Ⅲ	1回		期末	やまぐちと韓国	5分 自作映像 +スライド	
中国語	6 中国語 リスニングⅡ	2年	1回	期末	中国と日本の文化	5分
英語	7 実践英語Ⅰa	2年	1回	期末	Expo(万博)	5分
	8 実践英語Ⅰb		1回	期末	自由	5分
	9 アカデミック 英語Ⅲ	3年	グループ2回 個人2回	学期中	自由	5分

のアンケートから見えてきた課題と今後の展開について考察する。

9つの授業は韓国語においては1年生授業1つ、2年生授業2つ、3年生授業2つの計5つ、中国語は2年生授業1つ、英語は2年生授業2つ、3年生授業1つである(表1)。プレゼンテーションの実施時期は2つの授業以外、学期末であった。学期末以外で実施した「実践韓国語Ⅰ」と「アカデミック英語Ⅲ」については中間と期末で2回、もしくは学期中3回プレゼンテーション発表の機会があった。テーマについては、6つの授業で指定があり、2つの授業では学生個人が選択したテーマについて発表していた。ただし、「アカデミック英語Ⅲ」においては、主要なプレゼンテーションの型として「説得(Persuasive)」「意見主張型(opinion-based)」「原因+結果(cause + effect)」の3つを習い、その型に適したテーマについて3~4人のグループで2回発表を経験した後、個人で発表した。発表時間は1年生対象の授業が1分、2~3年生の授業は3分、5分、10分、15分とやや長め、英語と中国語に関してはすべて5分であった。

「韓国語Ⅰ」は対象が1年生で、大学で始めて韓国語を学ぶ学生がほとんどである。しかしながら、学んだ知識を実践的に使ってみる、役に立つと実感できる実体験は学習初期段階で非常に貴重であり、学習者の学習動機付けに効果的である。「韓国語Ⅰ」ではプレゼンテーション準備段階において、課外学習時間を確保し、サポート体制を設けた。まず、プレゼン準備前にアンケートを実施し、学生がプレゼンに関してどのような意見を持っているのか、どのような点を不安に思っているのか、またどの段階に時間がかかっているのかを調査した(実際のアンケートは文末「アンケート1」を参照)。まず「外国語でのプレゼンテーションの経験があるか」という問いに対し、64%が「ある」と回答、「36%」がないと回答し、全体的に発表経験がある学生が多いことが分かった(図1)。ただし全員が英語でのプレゼンテーションを経験したとのことだった。「難しいと思っているところは何か」という問いに対して、50%の学生が「発音」と挙げ、33%の学生が「翻訳」を挙げ、「言いたいことを韓国語にすることが難しい」と不安を抱えていることが分かった(図2)。

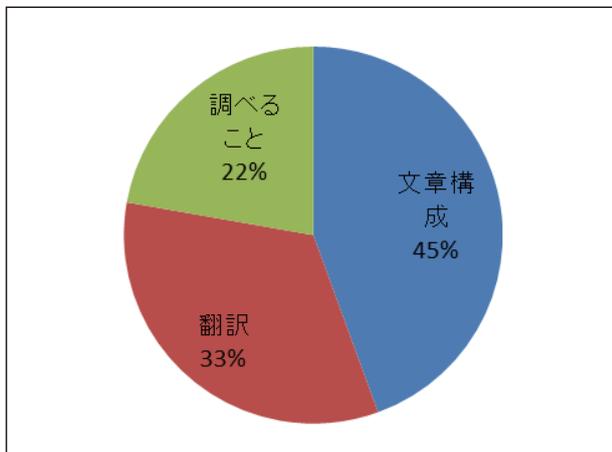


図1. プレゼンテーション経験の有無

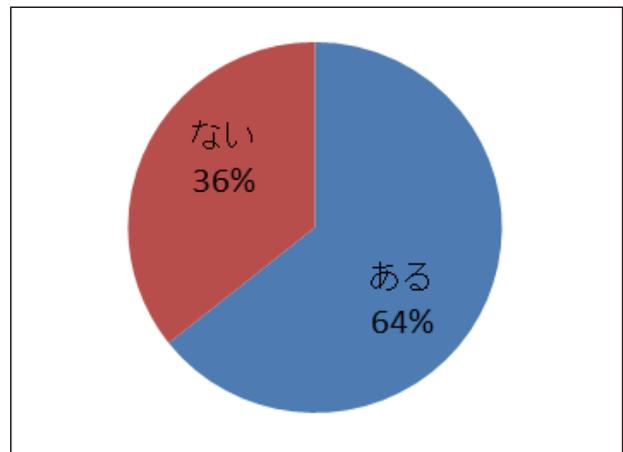


図2. プレゼンの経験から難しいと思うところ

事前アンケートの結果を受けて、そういった不安を解消しながら、初級学習者に自信をつけさせるために課外学習としてプレゼン準備を課すこととした。学習支援は韓国語学習サポーターが行った。学習サポーターとは留学経験者、留学内定者、留学生から構成され、言語学習の支援を行う(詳しくは金・森原 2014, 参照)。プレゼン準備の条件として、発表日までに必ず2回学習サポーターにチェックしてもらうこと、留学生によるネイティブチェックを受けることを課した。学習サポーターは全員で7名いたことから、2回とも違うサポーターにチェックしてもらい、アドバイスをもらうこととした。様々な学習背景を持った学習サポーターが学習支援をすること、そして複数の学習サポーターがプレゼンテーションをチェックすることから、アドバイスや指導を客観的かつ統一するため、ルーブリックとしてチェックシートを用いることとした(実際のルーブリックは文末「ルーブリック」を参照)。

2.3 プレゼンテーション後の学生アンケート結果

上記9つの授業ではプレゼンテーション発表後にアンケートを実施した（実際のアンケートは文末「アンケート2」を参照）。アンケートの目的は作成したプレゼン教材がどのように活用されているのかと状況を把握することと今後の学習支援のあり方を検討するためである。調査概要は表2のとおりである。質問項目は主に3つあり、プレゼン教材『+α：多言語プレゼンテーション』の利用状況（質問項目1と2）、発表の準備（質問項目3）、外国語でのプレゼンテーション発表を通して学んだこと・学べると思うこと（質問項目4）である。3年生対象の韓国語授業は履修者が少数であるため、2年生対象の韓国語授業の回答と合わせて掲示した。

表2. プレゼン教材『+α：多言語プレゼンテーション』の活用に関する調査概要

実施時期	2015年7月末～8月
調査方法	プレゼンテーションが授業の課題となっている上記9つの授業にて、プレゼンテーション発表後に実施。質問紙を配布し記入を依頼。任意かつ無記名。
有効回答数	韓国語：1年生12名、2年生10名+3年生2名 中国語：2年生8名 英語：2年生16名、3年生28名
質問項目	1. 『+α：多言語プレゼンテーション』の表現集を利用したかどうか 2. 「利用した」と回答した人のみ：表現集をどのように利用したか 3. 発表準備について ①内容・構成、②スライド作成、③外国語への変換 4. 外国語でのプレゼンテーション発表を通して学んだこと・学べると思うこと

2.3.1 プレゼン教材『+α：多言語プレゼンテーション』の活用

まず、『+α：多言語プレゼンテーション』の表現集の利用状況について述べる。プレゼン教材『+α：多言語プレゼンテーション』の第三部「プレゼンのための便利表現」ではプレゼンテーションの際に活用できるフレーズや単語を多言語で掲載している。アンケート結果では、1年生、2・3年対象の韓国語の授業では共に67%、中国語の授業では88%、2年生対象の英語の授業では56%の学生が「利用した」と回答した。その一方、3年生対象の英語の授業では57%という半数以上が「利用しなかった」と回答した（図3）。

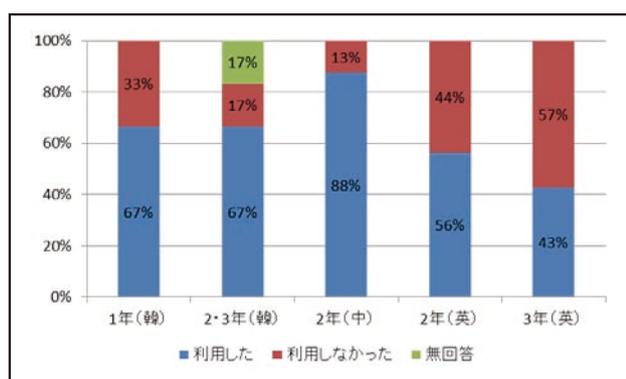


図3. プレゼン教材 表現集の利用割合

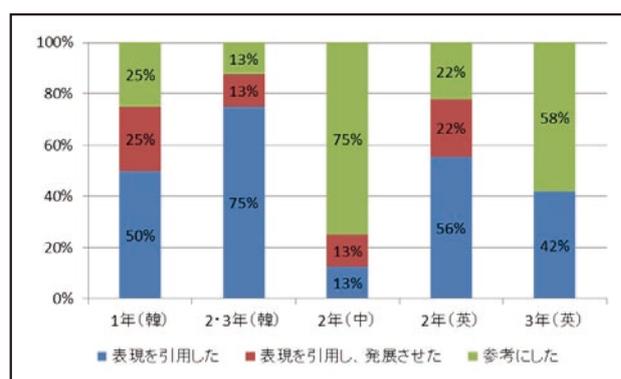


図4. 表現集の利用方法

次に利用の仕方について述べる（図4）。問1で「利用した」と回答した学生にのみ、どのように活用したのか、「表現を引用した」「表現を引用し、発展させた」「引用しなかったが参考にした」「その他（記述）」の選択肢から選んでもらった。韓国語の授業と2年生対象の英語の授業ではほぼ半数以上が表現集の表現を引用したと回答した。3年生対象の英語の授業でも「引用した」が42%、「引用しなかったが参考にした」が58%を占める。一方2年生対象の中国語の授業の場合、引用は著しく少なかったが、75%が「参考にした」と回答した。ほとんどの授業で回答者が表現を引用し、さらに自分のプレゼンテーションに合うよ

うにアレンジするなど発展させていることが認められた。

2.3.2 プレゼンテーション準備について

プレゼンテーション発表までの過程について、特に重要となる「内容・構成」「スライド準備」「外国語への変換」の3つに注目し、準備時間を比較した。まず、内容と構成にかかった時間は非常にばらつきがあるものの、大半が2時間以上時間をかけていることがわかる(図5)。スライド作成にかかった時間については大多数が1時間で作成していることが分かった(図6)。しかし、1年生の33%が「5時間以上」と回答しており、理由としては「内容・構成が明確に決まらなかったため、作成し始めてから迷いが生じた」や「スライド作成に慣れていない」などがあった。外国語への変換(翻訳)に関しても、1年生が最も時間がかかっており、約50%が2時間以上かけていた(図7)。2、3年生の韓国語履修者の約50%が外国語への変換に2時間以上かけていた一方で、2年生の中国語履修者においては、75%が2時間以下で変換できたと回答しており、両言語の違いについて検討が求められる。

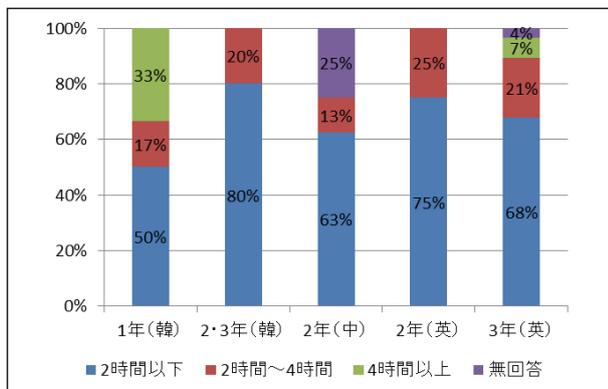


図5. 内容・構成 準備時間

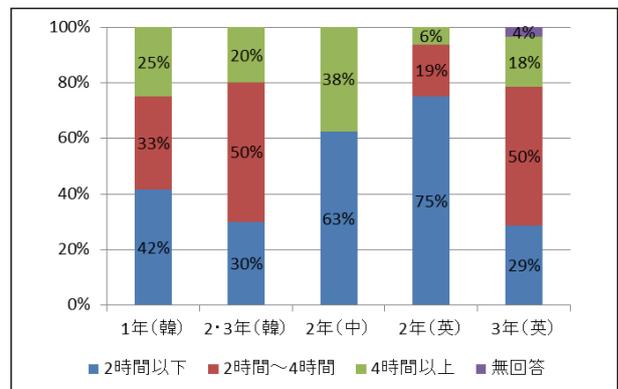


図6. スライド作成にかかった時間

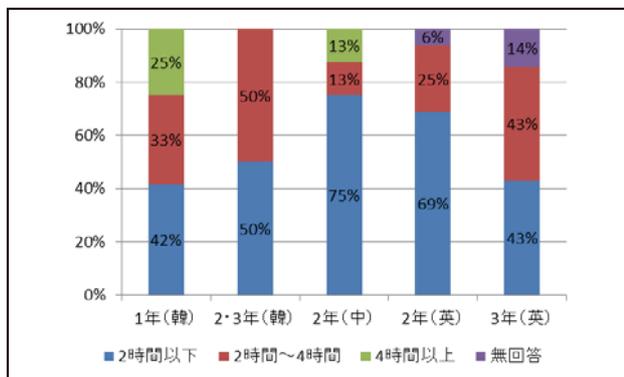


図7. 外国語への変換(翻訳)の時間

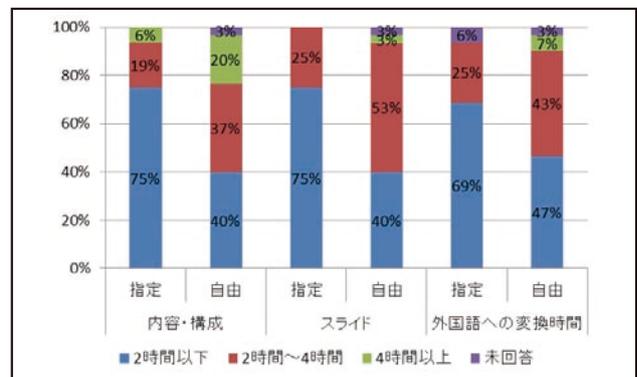


図8. テーマ指定と自由の英語授業における準備時間の比較

次にプレゼンテーションのテーマ指定について述べたい。2年生の英語授業「実践英語」においては、プレゼンテーションのテーマが1つは自由、もう1つが指定であったことから、準備時間を比較する。テーマが自由なものの方がテーマ指定のあるものに比べ、内容・構成、スライド作成時間、外国語への変換時間共に準備時間がかかっていたことが分かる(図8)。テーマ指定があったほうが「テーマに迷わず作業がしやすい」といった意見が多く、学生の外国語レベルの差とともにプレゼンテーションに慣れていない学習者やプレゼン発表に不安を持っている学習者にはある程度テーマを指定することが望ましいといえる。

2.3.3 プレゼンテーション発表を通して学んだこと・学べること

「外国語でプレゼンテーションをすることを通して学んだこと、学べること」について自由記述で回答してもらった。1年生からは「発音やイントネーション」、「日本語との表現方法や文化の違い」「プレゼンを考える中で文法や単語が学べる」など言語面のことと「しっかり伝えようとする」「発表する

相手のことを考えること」といったプレゼンテーション全般についての意見があった。2～3年生の上級生からは「簡潔な表現や短い文の方が伝えやすい」「似たような言語でもふとしたところで表現が違い、そのようなところから相手国の文化を学ぶことができた」、「表現方法は一通りではないこと」など表現についての感想や「どうすれば伝わるのか考えた」「伝わりやすい構成の仕方」など「伝えること」についても学んだことが伺えた。「大変だったけど多くのことを学んだ」「実践的な経験を積むことができてよかった」などプレゼンテーション発表に関しては肯定的な意見がよせられた。

また、全体的に「プレゼンテーション準備や発表に関するスキルは外国語授業だけでなく、他の授業でも汎用できる」という回答もあった。自分の意見を述べたり発信する能力を高める上でも『+α：多言語プレゼンテーション』教材を活用した授業は有効であったと評価できる。

2.4 アンケート結果の考察と課題

学生へのアンケートの結果を考察し、今後の授業におけるプレゼンテーション指導について検討する。

まず、準備については、どの過程において1年生（初級学習者）の準備時間が最もかかるか事前調査し、外国語学習支援やサポート体制を整えたことが有効であったといえる。初級学習者にとっては非常に困難だと思われるプレゼンテーション発表だが、上記でも述べたようなサポート体制を整え、準備時間を課外時間に確保することで実現できた。1年生の感想の中には、『難しくて無理』だと思っていたが、発表が伝わったので、自信になった。また挑戦したい。」といった内容のコメントが複数あった。このことから、プレゼンテーション発表をすることが学生への自信につながり、語学学習への強い動機づけを図ることができたと評価できる。

今後の課題として、授業担当者間で連携をさらに図り、プレゼンテーション指導を強化していきたい。表現集の利用や利用方法について違いがあった要因としては担当教員からの学生への声掛けが注目された。表現集の利用度の高かった授業では担当教員がプレゼンテーションの際に「表現集を引用・利用すること」を条件としたり、授業で実際に利用したりしていた。韓国語・中国語は学習経験が短いため、プレゼンテーションで活用するフレーズや決まり文句を学ぶ機会が相対的に少なく、このような表現集が役に立ったといえる。また、プレゼンテーションのテーマによっては表現集のフレーズや言い回しがあてはまらないことがあり、引用につながらなかったようである。上記でも述べたように、プレゼンテーションのテーマ指定の有無、テーマについても履修者のレベル、授業の内容と目的にあわせて検討することが望ましい。

プレゼンテーションに実施時期においても授業間での調整をとりたい。プレゼンテーション発表は学期末に課題と課されることが多いことから、ほとんどの学生が他の授業と発表準備、発表時期が重なっていたようである。プレゼンテーションの準備から発表までのプロセスに慣れるためには反復学習が効果的であり、PDCAサイクルが活用できることが望ましいからである。

3. 多言語音声ガイド制作の取組み

2015年度の言語プログラムの主な取組みとして、多言語音声ガイド制作の協働について報告する。多言語音声ガイドは、山口朝日放送株式会社が企画・準備をすすめているもので、山口県内の観光名所に設置することで、観光客がスマートフォンでアクセスすると観光解説などのアナウンスを聞くことができるシステムである。観光客の多様化に備え、日本語以外にも英語、韓国語、中国語のアナウンスを用意したいと本学の言語プログラムが依頼を受け、取組む運びとなった。今年度取り組んだのは2015年3月21日に一部オープンした宇部市ときわ動物園の「アジアの森林ゾーン」における動物の説明などのアナウンスを英語、韓国語、中国語への翻訳をし、音声ガイドを録音することである。制作に携わった学生は、各言語の学習サポーターである留学生と言語力が中級以上で海外留学経験があるという条件を満たした日本人学生の中から有志を募り、各言語4～5名で翻訳を行い、録音は全て留学生が行った（表3）。

表3. 多言語ガイドのスケジュールと学生の内訳

時期	2015年10月中旬～11月初旬	2015年12月8日～10日（3日間）
	作業内容	
言語	翻訳	録音
英語	学生5名 ●交換留学生1名（アメリカ） ●日本人学生4名（留学経験のある4年生1名、 留学内定2年生3名） ●教員によるチェック	学生2名 ●交換留学生2名 （アメリカ、カナダ）
韓国語	学生5名 ●交換留学生2名（韓国） ●日本人学生4名（留学経験のある4年生2名と 3年生1名、留学内定2年生1名） ●教員によるチェック	学生1名 ●交換留学生1名（韓国）
中国語	学生5名 ●交換留学生3名（中国） ●日本人学生2名（留学内定2年生2名） ●教員によるチェック	学生2名 交換留学生2名（中国）

次に制作過程を詳しく報告する。まず10月中旬から11月初旬にかけてガイドフォン作成担当の学生が翻訳を開始した。アナウンスの内容は「アジアの森林ゾーン」に住んでいる主に霊長類の特徴を説明するものであった。原稿の翻訳作業は留学生と各言語能力が中級以上の日本人学生が協働で行った。日本語の微妙なニュアンスや日本独特の言い回しやフレーズの意味を保ちながら、それぞれの言語で聞きとりやすく、且つ分かりやすい翻訳をするため、留学生と日本人学生が協働作業をしたことは非常に有効的だったといえる。例えば「河童のような○○」という説明は、「河童」が日本独特の架空の生物であることから、直訳や長文の説明はあえて使わず、「○○のような」といった他の表現にするなど工夫を凝らしていた。こういった翻訳経験があまりない学生が多く、初期に日本語のアナウンス原稿を見せた際には専門用語や名称を正確に翻訳したり、意味を重視した翻訳をすることは「すごく難しそう」といった不安の声もあったが、「大変そうだが勉強になりそう」といった前向きな声もあった。

学生の第一次翻訳終了後は、翻訳した原稿を基となる日本語の原稿と共に、英語、韓国語、中国語を母語とする教員に確認してもらった。その後、各教員から修正やコメント付きの原稿を学生に返して、その修正点やコメントについて全員で確認し、修正をした。特に翻訳の場合はニュアンスが鍵であり、伝えたい元のメッセージを明確に伝えるための言葉選びが重要である。そこで、修正された原稿を元に「なぜそうなるのか」「なぜこちらの翻訳の方がいいのか」といった点を話し合い、さらに推敲・修正を行い、学習の機会とした。1～2回の翻訳・推敲作業を終えた翻訳は山口朝日放送社を介して、宇部市役所や動物園監修側で最終確認され、最終的なアナウンス原稿となった。

次に録音について報告する。録音は2015年12月8日に中国語、9日に英語、10日に韓国語と3日間、山口朝日放送社の録音ブースにて録音を行った。録音担当の留学生は1人ずつ録音ブースにて録音、待機している留学生や日本人学生はブース外で原稿の読み間違いがないか、速度が適切か、イントネーションやリズムが正しいかどうかをチェックした（写真1、2）。録音ブースの中に入るといって慣れない環境のため、留学生たちは非常に緊張していたが、ブース外にいる学生がお互いに声を掛け合い、アドバイスをしたりすると、表情がほぐれ、だんだんと慣れてきた様子であった。

録音終了後の学生の翻訳や録音についての感想を以下にまとめる。「翻訳をすることで言葉の選び方などに敏感になった」、「日本に留学していた間に録音した自分たちの声がガイドフォンになって山口県に残ると思うとうれしい」「緊張したけれど、子どもの頃アナウンサーを夢見ていたので、夢がかなった」「プロのナレーターではないので完璧なナレーションではないかもしれないが、親しみをもってもらえる音声ガイドになったと思う」といった感想があった。



写真1. 録音中の様子



写真2. 録音チェックの様子

今回の取組みについては、動物園側の「多言語のアナウンスが必要だ」という地域のニーズと山口朝日放送株式会社が提供するサービス、そして本学が持つ知的・人的資源をかけあわせることで実現した企画だといえる（図9）。翻訳という外部からの依頼によって、学生の言語学習動機づけ、さらに意味付けを強化できたことは前述の感想から明らかである。また、言語プログラムコーディネーターが学内においても翻訳や録音をする学生と各言語の教員の間をとりまとめ、作業をすすめた。今後もこういった有機的な連携を図り、学生の学びを大学内のみで修めるのではなく、地域社会に貢献できる機会を増やすことで、学生の言語学習に対する動機づけを強化しながら、実践から学ぶきっかけづくりとしたい。

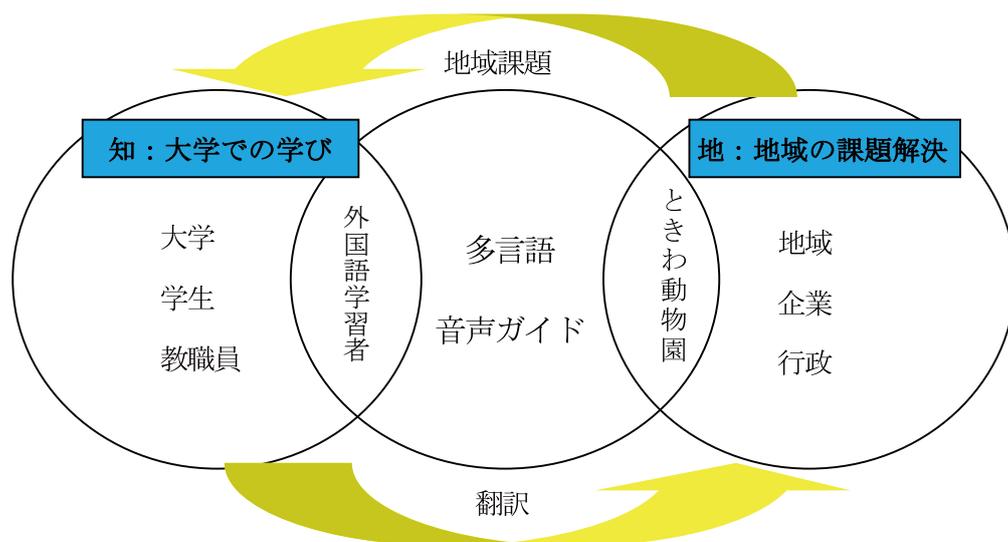


図9. 多言語ガイドにおける有機的な連携

4. 「言語学習と私の未来」セミナー

2015年12月13日（日）13時から15時までY-ACTにおいて本学卒業生を講師として招き、大学時代や卒業後の進路などの話を聞いた後、言語学習経験が自身の将来にどのように活かしていけるのか、といった意見交換をするワークショップを行った。セミナーの目的は主に3つあり、1つめは学生の持続的な言語学習、とりわけ上級生や留学経験者の言語学習に対しての動機づけ強化を図ること、2つめは在学生在が「言語学習」と自身の「将来ビジョン」を具体化する手がかりとして、卒業生の経験値を活用すること、3つめに卒業生と在学生の多様な支援・交流関係の形成を図ることであった。セミナーの主な対象者を学内に設定したことから、セミナー開催に関する広報は学内の情報システムであるYPU-ポータルとポスター掲示にて発信・周知した。

講師は2008年度卒業生2名（英語とスペイン語、韓国語を専攻）、平成22年度卒業生1名（英語を専攻）、平成24年度卒業生1名（中国語と英語を専攻）の計4名を招いた。パネルディスカッション、ワークショップ

の両方への参加者は全体で27名だった。内訳としては学生が13名（48%）、一般の方が9名（37%）、教員が3名（11%）であった（図10）。一般参加者の中には本学の卒業生が3名（11%）の参加があった。一般参加者の年齢は10代である高校生から80代まで実に幅広く、年代の壁を越えて言語学習と自分の将来などに結び付けることができた。

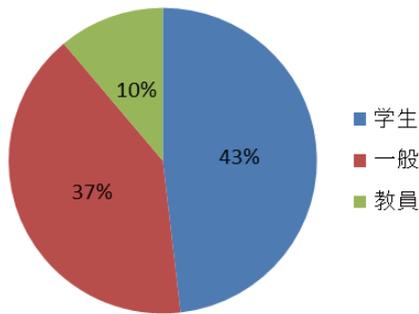


図10. 参加者の内訳



写真3. セミナーの様子

プログラムはパネルディスカッションとワークショップの2つの構成で行った。まず、パネルディスカッションでは大学時代から現在までの留学経験や言語学習経験を含め、5分程度で自己紹介をしてもらった。その後、大学時代や言語学習のテーマについて意見を述べてもらった。テーマ決定にあたっては、事前に学習サポーターや学習会に参加している学生から聞いてみたい質問を集めておき、そこから多かったものを抜粋した。1つめは「大学時代にやっておけばよかったと思うことは何か？ やっておいてよかったと思うことは何か」について思いを話してもらった。どの卒業生も口をそろえて「社会にでると時間がなくなるので、割と時間がとりやすい大学生のうちにいろんなことをしておくべき」といった時間の使い方についてアドバイスがあった。卒業生Hさんは「やっておいてよかったこと」として「自分がどんなものに興味があるのか、どんなものが好きなのかアンテナを張り、周りに話をしていた」と例を挙げながら説明をし、「大学の先生や先輩にいろいろと質問したり協力を求めるなど、自分から動くことが大切」とのアドバイスがあった。卒業生Kさんは「やっておいてよかったこととやっておけばよかったこと」両方に「知見を広める意味でも実際に現地に足を運ぶこと」を挙げ、毎月1度は旅行をしていること、欧米など時間がかかる遠方に短期でも行きたかった、と述べていた。2つめの「大学での言語学習や留学経験が仕事で活かされていると実感するのはどんなときか？」については、現在職場で営業をしているYさんは「営業のときに、初対面で話することや分かりやすく伝えようとする力」を、TさんはNGOでの仕事、海外青年協力隊の経験から、「人と話す楽しさ」を学んだと説明があった（写真4～7）。



写真4. 卒業生の発表



写真5. 卒業生の発表



写真6. 卒業生の発表



写真7. 卒業生の発表

次に参加者全員で6人～8人の5つのグループに分かれ、ワークショップを行った(写真8～11)。ピンク10枚、黄色10枚、緑色10枚、計30枚のカードに書かれたキーワードから、①～③の質問にあてはまるものを3つ選ぶというものである。同じ単語を複数回選ぶことも可能で、「その他()」にはグループで自由に考えたものを書くことができることとした。質問とキーワードは以下のとおりである(表4)。

【質問項目】

- ①言語学習(検定の学習)を通じて得るもの、学ぶものは何だと思いますか?
- ②大学時代にしっかりと身に着きたいもの/身に付けておけばよかったものは何でしょうか?
- ③10年後の社会で必要とされる人材に必要なと思うものは何でしょうか?

表4. 30のキーワード

カードの色	キーワード
ピンク 10個	語彙、暗記、文法、読む(リーディング)、書く(ライティング)、聞く(リスニング)、話す(スピーキング)、表現、やりとり
黄 10個	自己管理能力、ストレスコントロール力、計画力、自己分析力、発信力、コミュニケーション力、批判的思考力、プレゼンテーション力、実行力
緑 10個	オープンマインド(柔軟性)、自己アイデンティティ、前向きな姿勢、積極性、好奇心旺盛、思いやり、向上心、創造性、忍耐

各グループの回答は表5のとおりであった。①の回答で黄色の「コミュニケーション力」を選んだグループが最も多く、「計画力」「発信力」といった意見もあった。②の回答でも黄色が多く、「自己分析力」「自己管理能力」「実行力」「ストレスコントロール力」「批判的思考力」「プレゼン力」を選んでいった。緑色には「積極性」「好奇心旺盛」「オープンマインド」があった。③の回答で最も多かったのは緑色で、「創造性」が一番多く、次に「オープンマインド」そして「忍耐」という意見があった。また、①の質問にあてはまる「その他」に「出会い」、③に「想像」、「ITスキル」、「分析力」、「判断力」、「夢」といった回答があった。

表5. 各グループが選んだキーワードの色と数

	①	②	③	計
ピンク	3	1	0	4
黄	6	7	4	17
緑	5	5	7	17
その他	1	0	5	6



写真8. グループ活動の様子



写真9. グループ活動の様子



写真10. グループ活動の様子



写真11. グループ発表の様子

グループの発表後、30のキーワードは表6のようなカテゴリーによって色を区分していたことを伝え、再度グループで何を選んだのか確認してもらった。カテゴリーによって色を分けた理由は、グループで選んだキーワードがどのカテゴリーなのか分かりやすく可視化するためである。「知識・理解」である「言語」（ピンク）のキーワードを選んだグループは2つのみであり、また質問①『言語学習（検定の学習）を通じて得るもの、学ぶものは何だと思いますか？』に対してのみであった。②～③には全て「スキル」（黄色）や「意欲・態度」（緑色）を選んでいった。セミナー後のアンケートに「言語学習＝言語ではないことがしっくりきた」「言語＝知識ではなく、言語学習で多くのことが得られることがわかった」といった感想が寄せられ、今回のセミナーの目的であった「言語学習を多面的にとらえる」、つまり「言語学習そのものが目的ではなく、言語学習を通して習得できる「+α」スキル、学習姿勢、異文化理解などが重要である」という共通認識が確認できた。

表6. カテゴリー別キーワード

色	カテゴリー	例	キーワード
ピ ン ク	知識・理解	言 語	語彙、暗記、文法、読む（リーディング）、書く（ライティング）、聞く（リスニング）、話す（スピーキング）、表現、やりとり
黄	ス キ ル	学 習 姿 勢	自己管理能力、ストレスコントロール力、計画力、自己分析力、発信力、コミュニケーション力、批判的思考力、プレゼンテーション力、実行力
緑	意 欲 ・ 態 度	異 文 化 理 解	オープンマインド（柔軟性）、自己アイデンティティ、前向きな姿勢、積極性、好奇心旺盛、思いやり、向上心、創造性、忍耐

4.1 実施を終えて

セミナーの後、参加者に以下のようなアンケートを実施した（実際のアンケートは文末「アンケート3」を参照）。調査概要は表7のとおりである。

表7. セミナー実施に関するアンケート

実施時期	2015年12月13日（日）セミナー終了後
目的	山口県立大学において「インターローカル人材」を育成するために必要な外国語学習・教育への示唆を得るため
調査方法	セミナー後、趣旨を説明し、質問紙を配布し記入を依頼。任意かつ無記名
有効回答数	参加者 27名 学生13名、一般（卒業生や高校生含む）11名、教員3名
質問項目	1. パネルディスカッションとワークショップの満足度 2. セミナーで印象に残っていること 3. またこのようなセミナーに参加したいかどうか

まず、それぞれの満足度を尋ねたところ、パネルディスカッションは「大変満足している」が52%、「満足している」が48%、ワークショップにおいても「大変満足している」が56%、「満足している」が44%と大変満足度の高いセミナーだったと評価できる。

自由記述であったセミナーで印象に残っていること（よかった点）を以下にまとめる。

【学生】

「卒業生の生の声を聞いて今後の学生生活の活かせるのではないかと思った」

「これからどのような大学生活を送っていこうか考えるきっかけになった」

「自分も留学を控えているがやる気も出てきて自分ももっと頑張ろうと思った」

「普段学生と教員などしか交流しないので、60代・70代の方や卒業生と交流することで違う視点のアイデアや意見が聞けてとてもよかった」

「ワークショップでいろいろな世代の人と意見交換できて印象的だった」

「他の人の考え方を知り、自分の中の考えを発展させることができた」

「学生だけでなく職員の方や留学生とディスカッションができて新鮮だった」

「意見を聞くだけでなく、言い交すことが自分の見聞を広くする機会になりとてもよかった」

【一般の方】

「卒業生の方々のバイタリティーにとっても感心した」（60代）

「学生さんの経験がきわめて広く国際性に富み、どんどんと意欲的、積極的になり、自分の道を自分で切り開き、国際人として活躍されている姿に敬服した」（80代）

「学生さん・若い方の思考に触れ、大いに啓発され勉学の意欲を感じた」（80代）

「若者の人生に対する意欲、世界様式の一部を見せて頂きうらやましく思った」（70代）

「若い方のいろんな考え方、積極性にとっても好感を持った」（60代）

「グループでの話し合いは年代の違いを乗り越えて楽しく会話できた」（50代）

「意見がとてもおもしろかった。いろんな視点があって勉強になった」（10代）

「ワークショップが特に印象に残った」（10代）

「初めての経験で楽しめた」（30代）

学生が特に印象に残ったと回答していたのは、主に2つあり、1つは卒業生の話を聞くことで自分の将来

を考えるきっかけになったこと、そしてもう1つは他の世代の方と話をしたことで発見がたくさんあったということである。一般の方は卒業生の考え方や経験に驚いたこと、そして学生と同様、他の世代と一緒に意見交換をしたことが印象に残ったと回答していた。改善点としては、「在学生、高校生の参加がもっと多いとよかった」「時間が短かった」といった意見があった。今後の参考にしたい。「このようなセミナーがあったらまた参加したいか」という問いに対しては「参加したい」と参加者全員が肯定的な回答であった。

今回のセミナーでは、開催目的の1つであった言語教育の「4技能+*a*」における「+*a*」強化の成果として、将来の就職に直結しない場合においても「言語（習得過程）は一つの武器である」ことを再確認する機会を提供できたと評価したい。また、一般の参加者も一緒にワークショップが実施できたことで、意見や見解の幅がさらに広がり、学生にとっても貴重な経験となったといえる。

5. おわりに

以上、グローバル人材育成支援プロジェクト言語チームの2015年度の重点事業を述べた。2014年度に完成したプレゼン教材を授業で導入し外国語プレゼンテーションを取り入れること、地域・企業・大学が連携し、学生中心で多言語による観光ガイドアナウンス制作に取り組んだこと、そして「言語学習と私の未来」セミナーの開催について報告した。プレゼンテーション教材については、各言語科目において利用することを意識して作成した教材であったが、各言語の授業で利用方法や指導の統一を図り、授業外の時間のプレゼンテーション準備サポートを積極的に取り入れることが効果的だと分かった。

多言語観光ガイドについては、翻訳から録音まで留学生と日本人学生、教員。地域、企業が協働で準備をすすめることで、音声ガイドの設置目的や対象者を意識しながら翻訳をしたり、読むスピードやトーンを工夫したりといった単なる翻訳作業以上の学習の機会ができた。

「言語学習と私の未来」セミナーでは、学生が改めて「なぜ外国語を学習しているか」「言語学習の先に何があるのか」を考え、将来のビジョンを具体化させることができたといえる。また、一般参加者の方たちも一緒に意見交換をしたことでワークショップにさらに深みが出た。さらに、今回本格的な広報の対象ではなかった高校生の参加も得られ、ワークショップなどを積極的に参加してもらった。今後も4年間の大学時代をさらに充実させ、身近なロールモデルと地域の教育力の活用を具現化するためにもこのようなセミナーを実施し、より多くの学生、卒業生そして地域の方にご参加いただき、「なぜ学ぶのか」といった原点に立ち返るきっかけを提供していきたい。

金 恵媛（きむ へうおん）

専門：地域文化研究

所属：山口県立大学国際文化学部（教授）

hwkim@fis.ypu.jp

森原 彩（もりはら あや）

専門：英語教授法（TESOL）、外国語教育

所属：山口県立大学グローバル人材育成支援プロジェクト 言語演習コーディネーター（助教）

amorihara@yamaguchi-pu.ac.jp

プレゼンテーション前：アンケート1

プレゼンテーションの前に・・・

発表者： _____

1. これまでプレゼンをしたことがありますか？ ある ・ ない

「ある」と答えた人は、以下をお書きください。何の言語でどんな内容のプレゼンをしたのか教えてください。

- 何語：
- 発表形態：単独？グループ？
- 内容：
- 準備時間：内容・構成の準備時間： _____、スライド作成時間 _____、
外国語への変換時間： _____
- 発表準備で難しかったこと：
- 終わってから学んだこと：

2. 外国語プレゼンの準備についてお書きください。

- 外国語プレゼンをすることで、一番難しかった/難しいと考えることは何ですか？
- 今回韓国語でプレゼンをするのですが、一番時間がかかった/かかると思うことは何ですか？

3. 外国語プレゼンの準備で、特に注意した/したいと考えていることは何ですか？

4. 韓国語でプレゼンをすることで、どのようなことが学べる/学んだと考えますか。

5. その他意見があれば自由にお書きください。

プレゼンテーション後：アンケート2

外国語でのプレゼン、プレゼン教材「+α」について

発表者： _____

1. これまでプレゼンをしたことがありますか？ ある ・ ない

「ある」と答えた人は、以下をお書きください。何の言語でどんな内容のプレゼンをしたのか教えてください。

- 何語：
- 発表形態：単独？グループ？
- 内容：
- 準備時間：内容・構成の準備時間： _____、スライド作成時間 _____、
外国語への変換時間： _____
- 発表準備で難しかったこと：
- 終わってから学んだこと：

2. 外国語プレゼンの準備についてお書きください。

- 外国語プレゼンをすることで、一番難しかった/難しいと考えることは何ですか？
- 今回韓国語でプレゼンをするのですが、一番時間がかかった/かかると思うことは何ですか？

3. 外国語プレゼンの準備で、特に注意した/したいと考えていることは何ですか？

4. 韓国語でプレゼンをすることで、どのようなことが学べる/学んだと考えますか。

5. その他意見があれば自由にお書きください。

プレゼンテーション：ループリック

プレゼンテーション チェックシート

__回目(月 日)

発表者：_____ サポーター：_____

1. 全くそう思わない 2. そう思わない 3. どちらともいえない 4. そう思う 5. 非常にそう思う

内容の確認

項目	評価	コメント・気づき
プレゼンのインパクトはありましたか？	1 2 3 4 5	
伝えたい内容は明確でしたか？	1 2 3 4 5	
プレゼンの内容は充実していましたか？ (エピソードなど)	1 2 3 4 5	
表現集の表現が使用されていましたか？	1 2 3 4 5	

プレゼンの構成

内容がわかりやすい順番になっていましたか？	1 2 3 4 5	
導入・本論・結論のバランスがとれていますか？	1 2 3 4 5	

プレゼンの仕方（デリバリー）

ペース	・緩急がありますか ・聞きやすい速度ですか	1 2 3 4 5	
声	・聞きやすい大きさですか	1 2 3 4 5	
表現	・聞き手にとって分かりやすい ・発表者にとって言いやすい	1 2 3 4 5	
発音	・はっきりしていますか	1 2 3 4 5	
姿勢	・背筋はまっすぐですか	1 2 3 4 5	
視線	・聞き手を見えていますか (原稿ばかり見ないこと)	1 2 3 4 5	
時間	・制限時間内に終わりますか	1 2 3 4 5	

・参考にしたい点：_____

セミナーについて：アンケート3

「言語学習と私の未来」セミナー アンケート協力をお願い

このアンケートの目的は、山口県立大学において「インターローカル人材」を育成するために必要な外国語学習・教育への示唆を得ることにあります。アンケートの結果は、教育研究の目的以外には使用しませんので、率直なご意見を頂けますようお願いいたします。

2015年12月13日調査責任者：金恵媛・森原彩

あなたご自身のことについてお伺いします。あてはまるものに○をお願いします。 学生/ 卒業生/ 一般

上記で「卒業生」「一般」とご回答の方は右のあてはまるものに○を付けてください。 ■お住まい：県内（ 山口市 / その他 ） 県外
 ■ご年齢： 20代 30代 40代 50代 60代 70代

それぞれのセクションについてご回答ください。

1. パネルディスカッションはいかがでしたか？ あてはまるものに○をつけてください。

全く満足していない	満足していない	どちらともいえない	満足している	大変満足している
1	2	3	4	5

1-1. 上のように回答した理由を教えてください。

2. ワークショップはいかがでしたか？ あてはまるものに○をつけてください。

全く満足していない	満足していない	どちらともいえない	満足している	大変満足している
1	2	3	4	5

2-1. 上のように回答した理由を教えてください。

3. 今回のセミナーで特に印象に残ったことはありますか。（よかった点、改善点など）

4. またこういったセミナーがあれば参加してみたいですか？ はい / いいえ

5. a の他お気づきの点、ご感想などありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました！

* 本調査についてのご不明な点がございましたら、金・森原

(083-928-5634/amorihara@yamaguchi-pu.ac.jp) にご連絡ください。

Language Learning Activities and Outcomes of Cooperating with Diverse Entities - Presentations in Foreign Language Classes, the Multilingual Voice Guide System, YPU Language Learning Seminar -

KIM, Hyeweon MORIHARA, Aya

Since 2012, the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University has been implementing “The Project for Promotion of Global Human Resource Development”, a project funded by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The ideal Global Human Resource we are cultivating is “Inter-local Human Resource” who is able to link people and communities worldwide to solve the challenges they face. In order to develop “Inter-local Human Resource”, the Faculty of Intercultural Studies has developed an education system with four main features, 1) “YPU at Home and Abroad Program”, 2) “Four-Skills + α ”, 3) “Initial Professional Development-IPD Point System”, and 4) “YPU Future Consortium”. In addition, we will reinforce the education program even more with the new curriculum in the next academic year.

This paper reports the results and the progress of three main features which the foreign language education program in the Faculty of Intercultural Studies have achieved for the 2015 academic year: 1) using the presentation textbook in the foreign language classes, 2) creating multilingual announcements in Tokiwa Zoo in Ube city by cooperating with the Yamaguchi Asahi Broadcast, the local broadcast station, and 3) organizing a seminar, “Language Learning and My Futures” on December 13th, 2015.